

山名大教会の台湾伝道復興と加藤勇

山名大教会の台湾伝道復興

前回(3月号)では、戦後初めて短期滞在で渡台した日本人布教師・加藤勇(のちの嘉義東門教会3代会長)について紹介した。加藤勇が渡台したのは、教祖70年祭を控えた1953(昭和28)年であった。1967(昭和42)年に三濱善朗8代庁長が布教ビザを取得し、戦後初めて庁長として渡台を果たす14年も前のことだった。筆者は、近年公開された中華民国(台湾)政府の公文書デジタルアーカイブの中から自ら発見した史料に基づき、嘉義東門教会につながる現地信者たちが加藤勇を何とか招聘しようと台湾省政府民政庁長宛に陳情書を提出したことを明らかにし、日本と台湾双方で加藤の渡台実現のために尽力したことを述べた。

では、なぜ戦前台湾に39カ所あった教会の中で、嘉義東門教会の加藤勇の渡台はこんなにも早い時期に実現したのだろうか。それは、嘉義東門教会が布教対象を本島人(現地人)としていたこと、そして教会開設は1913(大正2)年と早く、終戦までの32年間にわたって現地信者を丹精する中で社会的エリート層にも信者を広げていったことが理由として考えられる。実際に陳情書を作成した教会関係者の弁護士・黄宗焜はのちに、立法委員や嘉義県知事を務めた。さらに、三濱庁長が渡台後に住居および台湾伝道庁仮事務所を探すことに尽力したのは、山名台北佈道所の理事長(理事長)の陳居住とこの黄宗焜であった。2人は、伝道庁の財団法人である「中国天理教総会」を設立するために、すでに財団法人として台北市政府から認可を受けていた山名台北佈道所の理事長および董事(理事)全員をそのまま「中国天理教総会」の董事も務めてもらうことにして、中央政府の内政部から認可を受けることになった。(天理教台湾伝道史編集委員会、88-89頁)。このように伝道庁復興において山名大教会および加藤勇は大きな役割を果たしたと言える。

異文化伝道において加藤勇の果たした役割

加藤勇の略歴は次のとおりである(加藤・1968、86頁)。1919(大正8)年6月25日、台湾生まれ。台湾に育ち1938(昭和13)年2月天理中学校卒業。予習科を修了して天理教教師に補命され、爾来教会にて教務に従事した。台湾語は台湾人と同様堪能で、役員信者および布教所の仕込みに専念した。太平洋戦争終了と共に台湾は中華民国に返還されたため、会長加藤鍋吉と共に山名大教会に引き揚げた。その後も内地布教の傍ら、機会ある度ごとに台湾に渡航し、役員信者の指導に当たった。2代会長の出直し後、1965(昭和40)年11月27日に3代会長に任命された。

特に、彼自身が「台湾語は台湾人と同様堪能にて役員信者および布教所の仕込みに専念した」と記述している点が重要である。当時、台湾は日本の統治下であったため天理教は基本的に日本語で書かれた教理書に基づいて日本語で教えが説かれていた。日本統治が始まって日本語による教育を受けた世代や、その後天理中学へ内地留学した現地人を除いて、日本語がスムーズに理解できる本島人はきわめて少数であった。現在の台湾における中国語(台湾華語)は、当然のことながら戦後の中華民国によって普及したものであり、当時現地の人々が生活言語として使用していたのは台湾語(閩南語)であった。しかし、台湾語は発音も難しく、文法も中国語と異なる部分もあり、統一

した表記法も整えられていなかった。

そこで重要になったのが日本語と台湾語に^た長けた人材であり、この言葉と基底にある文化・習俗の違いが本島人布教の大きな障壁として立ちちはだかったのである。金子圭助は、著書の中で嘉義東門教会初代会長・加藤きんと孫の3代会長・加藤勇との関係について次のように書いている。「きんは自分のできなかった夢を孫の勇に託した。台湾伝道の荒道開拓者とするため、勇の幼児期より台湾人信者の家に預けた。台湾婦人の乳を飲ませ、台湾人の生活を送らせ、台湾人同様に育てた。中学校だけは、おぢばの天理中学校へ入れた。勇はきんの期待にこたえ、台湾語(閩南語)に精通し、何ひとつ不自由はしない。風俗習慣にも精通している。台湾伝道の先導者として道の上に活躍し、嘉義東門教会につながる信者たちに兄か親のように慕われている」(金子、149～150頁)。さらに、加藤きんのいんねんの自覚については、次のように述べている。「家は代々男子後継者が育たなかったといういんねんである。きんの祖父の代以前から養子のいんねんで、父も養子、きんの夫弥市郎も養子のような立場、娘まさの夫鍋吉は養子、分かっているだけでも四代養子が続き、五代目に嗣子勇が生まれた。きんは勇の出生を非常に喜び、やっといんねんが切れたようだと「言った」(同上、146頁)。また、営林署の務めをなかなか辞めない鍋吉(のちの2代会長)がようやく辞めて、別科に入ることを決意した時に、きんは「鍋さん、嘉義東門という教会はなも、台湾の人を専門にお救けする教会として許されたところで、世界だすけを信条となさる教祖の思召の上から、まんだ遅々とした歩みじゃけれど、現地人布教をしている教会は思召に叶った教会やと思うりますきに、その教会を継いで、子々孫々末代まで本島人のおたすけに励んでおくれやす」と頼んだという(同上、121頁)。

加藤勇は自らの幼少期を振り返り、「私は祖母の遺志を継いで厳格な両親に見守られ、台湾人社会で育てられた。子供のころから台湾の三字経、論語、民間信仰者の信奉される神々の降筆による聖經を聞かされたので現代には通じないカチへのドタマと成っているようだ」(加藤・1969、24頁)と述べている。さらに、「台湾と私」という寄稿を依頼されて当惑してしまったと胸の内を吐露しながら、自身のアイデンティティについて、「仮面の私と本当の私と言う人間像なるものになるのではないか。仮面の私とは日本での私であり、本当の私とは台湾に於ける私となる訳である」と述べている(同上)。加藤勇は、まさに加藤きんの本島人布教という遺志を引き継ぐため、台湾人となり、天理教が台湾という異文化伝道の中で、日本と台湾双方を言葉と文化を深く理解し、二重のアイデンティティを持った橋渡し役として、台湾信者から兄や親のように慕われ、戦後は中華民国の統治下となった台湾で伝道復興のために大きな役割を担ったのである。

[参考文献]

- 加藤勇(1968)「台湾の道(四) 嘉義東門教会(山名)」『フォルモサ』4号、59～86頁。
加藤勇(1969)「七度生れ変っても台湾伝道を」『フォルモサ』6号、24～26頁。
金子圭助(1983)『炎の女伝道者 加藤きん』天理教道友社。
天理教台湾伝道史編集委員会(2025)『天理教台湾伝道史』。